

幼児前期の保育活動(二)



音楽活動

前回は二歳児の粘土活動について述べましたが、今回は二歳児の音楽活動について私たちの行ないました実験の結果を記述してみたいと思います。

1 目的

二歳児の音楽面における発達を「鑑賞」・「歌唱」・「リズム活動」・「表現活動」の各面からみるとともに、保育効果についても考察します。

2 研究方法

実験期間及び被験児については前回述べましたので、ここでは音楽の発達並びに保育効果を研究するための実験方法と、母親からきいた被験児の音楽面における発達並びに音楽的環境について

記します。

〔実験方法〕

実験群の幼児たちを次に述べるような音楽的に留意した環境の中で、週一回ずつ12回保育しました。

- ・毎回二、三曲のレコードをステレオでかける。
- ・子どもからレコードやピアノ、歌などの要求があった時には、できる限りその要求を満たすようにする。
- ・まず、タンブリン、カスターネットなどの簡易打楽器と、ピアノはいつでも自由に使用させる。
- ・童謡絵本を留意する。

実験群の1~12回の実験中に課題として、次のことを行ないました。

・「きれいなさかな」(平塚武二作詞・渡辺茂作曲)の歌唱指導

岡 本 明 子
金 井 淑

表1 音楽活動一覧表

群	実回	験数	鑑賞	歌唱	指導	楽器遊	器遊	表遊	現遊	リズム	不遊
実験群	1	○					○				
	2	○					○				
	3	○		きれいなさかな				○			
	4	○		きれいなさかな			○	○			
	5	○		きれいなさかな			○				
	6	○		きれいなさかな				○			
	7	○		きれいなさかな			○	○			
	8	○									
	9	○									
	10	○							○		
	11	○							○		
	12	○									
	13			まつぼっくり				○	○		○
	14			まつぼっくり				○	○		○
	15			まつぼっくり				○			○
統制群	1			まつぼっくり				○		○	○
	2			まつぼっくり				○		○	○
	3			まつぼっくり				○		○	○

○印は活動が行なわれたことを示す

加しない子どもには言語によるさそいかけにとどめ、強制的に参

なおいずれの活動においても子どもの自主的参加を重んじ、参

以上の活動の行なわれた回数を示したのが表1です。

・「出してひっこめて」(小町昭編曲)の簡単なリズム遊戯の指導

・動物の自由表現

・楽器遊び

・「まつぼっくり」(広田孝夫作詞・小林つや江作曲)の歌唱指導

を行ない、両群に次の課題を行ないました。

実験群の13~15回の実験と並行して、統制群の1~3回の実験

・ピアノに合わせて動物の自由表現

・簡易打楽器を使用した楽器遊び

加させたりはしませんでした。

〔被験児の音楽面における発達〕

ほとんどの子が二歳前後で歌が歌えるようになり、ひとり遊びの時などに自作の歌を歌うようです。音楽をきいて体を動かすことは、早い子は十か月頃から、遅い子は二歳六か月頃からそのような動作が見られるというように個人差があります。

好きな音楽はどの子どもも童謡を挙げ、クラシックの好きな子はC夫のみ、反対にクラシックをかけるといやがる子はB夫です。

〔家庭の音楽的環境〕

どの子ども一歳頃からおもちゃの楽器を与えられています。また、どの家庭にもステレオやレコードプレーヤーがあります。子どものために使われる回数はありません。家にピアノがあり母や姉がひく家庭が三(B夫・D子・F夫)。母や兄がバイオリンをひく家庭が一(G夫)あります。

家が商店街に面しているのはA夫のみで、他は皆住宅街に住んでいます。

3 結果と考察

① 鑑賞

本実験でかけたレコードとその回数は次の通りです。〔〕内の数字は実験回数。

・交響曲「ジュピター」(モーツァルト作曲)〔1 2 4 5 6 7 8

9 10 回]

・管弦楽曲「ベルシヤの市場」(ケテルビー作曲)〔2 3 5 回〕

・ピアノ曲集「エリーゼのために」他五曲〔4 6 回〕

・ワルツ「ウインナー氣質」(シュトラウス作曲)〔7 回〕

・描写音楽「森のかじや」他十一曲〔10 11 12 回〕

・ピアノ協奏曲「アイ・ゴット・リズム」(ガーシェイン作曲)

他一曲〔8 9 回〕

・ウィーン少年合唱団合唱曲集「カッコとロバ」他九曲〔11 12 回〕

回]

・琴独奏「六段」(八橋検校作曲)〔11 12 回〕

・ジャズ「タイガー・ラグ」他一曲〔12 回〕

・歌「七ひきのこやぎ」(夢虹二作詞・小谷肇作曲)〔12 回〕

以上のレコードはほとんど自由遊びの時にかけ、実験者側からレコードをかけたことを子どもに知らせたりせずに、子どもの自然な反応を観察しました。

次に反応のみられたものについて、簡単に述べてみます。

(イ)「ジュピター」・「ベルシヤの市場」

初めの3回にだけ、レコードをかけた時に一瞬遊びを中断したり、終わった時に「終わったよ」と告げたりしましたが、その後は何の反応もみられません。これはこの二曲に対してのみ特有な反応ではなく、不意に聞こえてきたり、止んだりする「音」に対

する反応と考えられるでしょう。

(ロ)描写音楽「森のかじや」「おもちゃの兵隊」「鉛の兵隊」「森の水車」など。

「何の歌なの?」と質問したり「くの歌だ」と告げたりすることがA夫、E子にかけるときにみられました。これは子どもにとっても何か具体的なものを感じさせる要素が描写音楽にあると考えられます。

また、一度だけA夫が「おもちゃ交響曲」に合わせて踊るように体を動かしているのが観察されました。

(イ)「七ひきのこやぎ」

この話は絵本が実験場面に用意してあったため、被験児全員が知っていました。

次に反応を記録から抜き書きしてみます。

自由遊びの時にレコードをかける。

A夫・C夫 ステレオの所へくる。

B夫 少し遅れてステレオの所へくる。

A夫 歌が一節終わるごとに楽しそうに笑いながら歌詞の一部を繰り返している。

D子 部屋中央の机の所で遊んでいたが、レコードが「メンメンメー」と歌うと突然大声で「うさぎだー」という。

レコード終わる。

A 夫・B 夫 「もう一ぺんやる」と要求する。

レコードを再びかける。

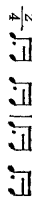
A 夫 曲のリズムに合わせて「ハハンハハン」と笑いながら体を左右に動かす。

E 子 遊びをやめて黙ってタンブリンをとってきて床にすわり曲に合わせて拍子打ちする。

レコード終わる。

B 夫 「もう一回する」と要求する。

再びレコードをかける。

なぜこのように全員の子どもが関心をもってきき、この曲を好んだかを考えてみますと、この話が子どもたちに親しまれているからだけでなく、曲全体が明るい感じで、

というはずんだリズムで作られており、うきうきしてくるような楽しさを感じられることが原因でありましょう。また、簡潔で明瞭な歌詞も理解されやすく、その上男性歌手の歯切れのよい歌い方も子どもの心をひきつける大きな要素となっているのです。

(⇒)「六段」

「七ひきのこやぎ」が子どもたちに好まれたのに対して、この曲はB 夫にだけですが、非常にはつきりと嫌悪の反応がみられました。

B 夫 ステレオの所で実験者がレコードをかけるのを見てい

る。

レコードをかける。

B 夫 「やんないの？」と実験者に尋ねる。

実験者 「何を？」

B 夫 「人間のお歌」「お歌が入ってないじゃない」

実験者 「入ってないわねえ。これ嫌い？」

B 夫 「入ってるのが好きなの。これ嫌いななの」と何度もやるように要求する。

A 夫もB 夫のように拒否はしなかったが、不思議そうな驚いたような表情をみせていました。このように今までにきいたことのない琴の音や、きき慣れないメロディーに子どもたちはとまどい、不安な感情を抱いているのでしょう。これももし、以前から日本音楽を耳にする機会の多い子どもであれば異なった反応が現われると考えられます。

以上の(1)～(5)以外の曲でも、はっきりした反応がみられないからといってその曲に全く関心がないとか、嫌いであるとはいえません。

② 歌唱

本実験中に被験児が歌った頻数は、既成の曲142、即興的創作歌127、計269になりました。特に即興的創作歌は歌詞の上からも、メロディーその他の音楽的な点からもおもしろいものが多く、さま

(a) レコードをかけたたり、実験者が歌ったことに対して何の反応も
 (i) のようではありません。
 歌唱指導の際にみられた被験児の行動を挙げてみると次の(a)の過程をとりました。

群に実施しました。指導の際にはいずれの場合も、自由遊びの時にレコードをかける、実験者がレコードに合わせて歌う、ピアノをひきながら実験者が歌ったり被験児に歌わせたりする、という過程をとりました。

A夫 ピアノの譜面台にのっていた楽譜をめくり
 「これ何の歌?」

実験者 「きくの花っていうのよ」

A夫



③ 歌唱指導
 実験方法の項で述べました「きれいなさかな」の指導を実験群のみに、「まつぼっくり」の指導を実験、統制両

さまの観点から分析でき非常にもしろい問題ではあります。今回は紙面の都合上即興的創作歌の例を一つ紹介するにとどめ、またの機会に譲りたいと思います。(上記)

表2 第一回歌唱指導における被験児の行動

被験児名		実験回数				
		3	4	5	6	7
実験群	A 夫	b	b	d, f	欠	d, f
	B 夫	a	a	b	b	a
	C 夫	a	e	e	c, f	a
	D 子	a	a	a	a	d
	E 子	a	a	c, d	c, d, f	d, f

表3 第二回歌唱指導における被験児の行動

被験児名		実験回数			家庭での子
		13(1)	14(2)	15(3)	
実験群	A 夫	c	c, d, f	a, d	b
	B 夫	a	b	a	i
	C 夫	欠	欠	欠	
	D 子	b	a	a	a
	E 子	a	f, g, h	d, e, g	h, i
統制群	F 夫	欠	a	欠	a
	G 夫	b	b, c, e	a, d	a
	H 子	a	欠	a, d	b
	I 子	b	d	b	b

- (i) 単に指導の場面だけでなく、自然に楽しんで口ずさむようになる。
- (h) 歌に合わせて動作を考える。
- (g) 全曲を正確に歌う。
- (f) 歌の一部分をレコードや他の人の歌に合わせて正確に歌う。
- (e) 歌の一部分をレコードや他の人の歌よりやや遅れて模唱する。
- (d) 曲に合わせて体を動かしたり、楽器をたたいたりする。
- (c) その歌を歌ったり、レコードをかけることを要求する。
- (b) 関心をもって歌をきく。
- 示さない。

(注) は統制群の実験回数
 実験回数()内

る。

以上の九つの行動を被験児別に示したものが表2・表3です。

この二表から明らかのように(a)~(i)の行動は、すべての被験児にみられるとは限らず、現われる順序も一定ではなく、個人差が大きいようです。しかし、子どもが新しい歌を覚える時にはほとんどの場合に、I、きく(曲のリズムや感じをつかむ)II、部分を歌う。III、全曲が歌える。IV、その歌を完全に自分のものにする、という段階を経るようです。次に本実験でみられたタイプをいくつか挙げてみます。

・(a)の状態がほとんどみられない。(A夫・G夫・I子)

・(b)の行動が全然みられない。(E子)

しかし、この場合の(a)の状態は(b)の行動が外には現われないものとみてよいでしょう。

・(a)~(d)の行動のみで一度も課題曲を歌わない。(D子・G夫・H子・I子)

・実験中には課題曲を歌うことはなかったが、家庭では楽しんで完全に歌う。(B夫)

・他の被験児と比較して、早くから模唱がみられたが、結果的には他の被験児と差がみられない。(C夫)

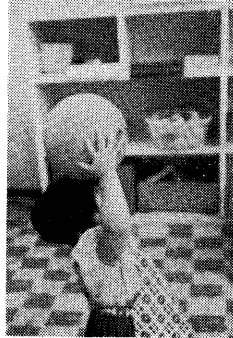
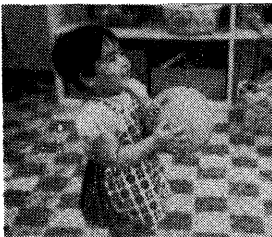
次に表2と表3を比較しながら、歌唱指導における保育効果について考えてみます。

実験群では、どの被験児においても第二回(まつぼっくり)には第一回(きれいなさかな)に比べて(a)以外の行動が早くに現われており、また第一回の初めの3回の実験では(a)~(f)の行動だけ

であるが、第二回の3回の実験では(a)~(i)までの行動がみられます。これは課題曲の内容の違いによる点も考えられるが、第二回の統制群の行動が(a)~(e)で第一回の実験群の行動と類似しており、同じ第二回の実験群の行動ほど発展がみられないことから、実験群の第二回歌唱指導には保育効果が認められると考えられます。

ここにのせました四枚の写真(写真①~④)は、14回の実験の際にE子が「まつぼっくり」に合わせてつけた、ボ

写真①「まつぼっくりがあったとき」
「まっボールを胸の前に持たせ」

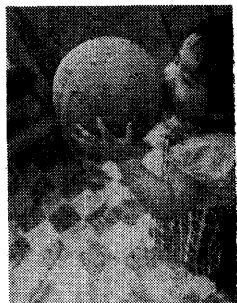


写真②「たかいお山にあつたとき」
「ボールを頭上にかかげる」

写真③「ころころころあつたとき」
「ボールをころがして追いかける」



べてく
たつく
て拾い
っ持っ
る一持
ひろ持
がホヘ
る「こ
ささこ
ささこ
おとの
たの口
写真④



ールを使用しての遊戯で
す。E子が独りでボール
遊びをしていた時にレコ
ードをかけると、自分で
も完全に全曲歌いながら
遊戯をしました。

④ リズム活動（楽器遊び・リズム遊戯）

楽器遊びをする際には、楽器の使用法並びに拍子打ち、リズム打ちなどの打ち方については実験者が一切指示を与えずに行なっていました。

〔楽器の使い方〕

各楽器の使用法で、
特徴的な点をいくつか
挙げてみます。

タンブリン……歩き
ながらたたく場合が多
く、じっとして使うこ
とはほとんど見られな
かった。杵の指を入れ
るための穴は使われ
ず、全員が杵を握って

たたいていた。（写真⑤参照）

すず……体を動かしながら使う場合とじっとして使う場合がほ
ぼ半々にみられた。

カスターネット……被験児のほとんどが片手ではきんでならし、
手の平にのせてもう一方の手でたたく方法はI子にだけしか見ら
れなかった。（写真⑥参照）いずれの場合も指を通すためのゴムは
使われず誰も気に留めている様子ではなかった。

ピアノ……一人の子どもについても、一本指でひく、手の平で
押す、片手でひく、両手でひく、などいろいろな方法がとられ
た。手を鍵盤の上で幅広く動かす子と、同じ音ばかりひく動きの
ない子とある。

全体としてみると、活動的な子どもはすべての楽器遊びに参加
し、充分楽しんでる様子で、しばしば自分から楽器を出してき
てレコードやピアノをひくように要求しました。

逆に不活発な子どもは小さくカスターネットは床にすわっ
たままの姿勢で使用しましたが、タンブリンやピアノはほとんど
使われませんでした。

〔リズム反応〕

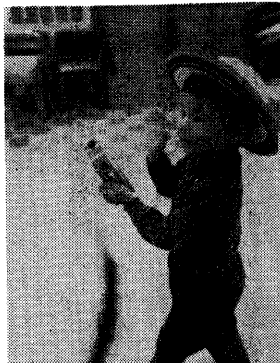
本実験でみられた簡易打楽器によるリズム反応は、次の三つに
分けられます。

(1) 音楽にかまわず、めちゃくちゃにたたき、この場合は、ただた

写真⑤



写真⑥



たぐことが楽しい、という段階と考えられます。

(ロ)音楽に合わせて楽器を拍子打ち(等間隔打ち)する。この場合は明らかに音楽のリズムを体で感じていると思われれます。

(ハ)曲のリズムに合わせて楽器をリズム打ちする。

これは以前にきいたことのある曲、知っている曲などでないとききない場合が多いようです。

次に実験群の15回の実験中にみられた変化を挙げてみます。

・(イ)の状態のみで変化がみられない。(B夫・D子)

・(ロ)↓(ハ) 5回頃から少しずつ拍子打ちがみられ、その割合が徐々にふえてきて、速度の急激な変化にも多少のとまどいはある

がついていける。(A夫・C夫)

・(ロ)↓(ハ) 5回頃から曲のリズムに合わせて楽器を打とうとする態度がみられ、自分でも満足するほどのできばえの時には嬉しそうな表情をする。(E子)

なお統制群ではF子が拍子打ちができるほかは全員(イ)の状態で、実験期間中に変化のみられた者もありません。

このように二歳児のリズム反応においては、非常に個人差が大きいです。実験群では5回頃から変化のみられた子があるが、その原因を考えてみると、実験者が意図的にリズムのとり方などを指導しなくとも、環境を整えておいたことや、子ども同士がお互いの刺激となつて、変化や進歩がみられたと思われる。

表4 リズム遊戯指導の過程

実験回数	指導方法	実験群	統制群
13 (1)	遊びのコーナーかともかきかけたりは働かない。 自時ド実	何の反応もない	G夫:「何の歌なの?」と実験者に尋ねる。
14 (2)	ド実験をせよ コード遊びをせよ レかけがっとう。 か者や子そ	A夫: 実験者より1〜2拍ねる。(写真⑦) C夫: 参母のそばで少しおくるにきやがらない。 D子: A夫に合わせる。 E子: 実験者に正しく(写真⑧参照)	G夫: 実験者より2〜3拍だけ持たせてみる。 I子: 関心を持っている。
15 (3)	上に同じ	A夫: 実験者より1拍ねる。 E子: 実験者に合わせる。	H子: 関心を持って見ているがしない

(注) 実験回数の()内は統制群の実験回数



写真⑦



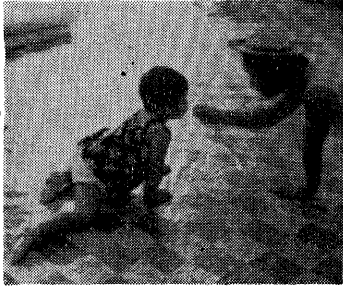
写真⑧

〔リズム遊戯〕

実験者が「出して」の所で手を前に出し、「ひっこめて」で手をひっこめ、「一二三」で3拍拍手する」の繰り返し遊戯をして、被験児にまねさせて指導しました。

前頁表4に実験、統制両群の反応をまとめてみました。この表に示されたように、実験群は統制群に比べ、この活動に対する関心も強く、かつ新しい遊戯を覚えようという意欲も強いようです。また、リズムのとり方や、覚える速さなどの点でも実験群の方が優れているようです。これらは過去12回にも渡る実験の積み重ねによる保育効果とみられると考えます。

⑤ 表現活動



写真⑨

実験者側からは言葉によるさそいかげや、ヒントにとどめ、実際に形を示すことはしないで、子どもが自由に表現できるようにしました。
本実験で表現した動物とその表現内容は、次の通りです。()内の数字は実験回数で、○印のついているのは統制群の実験回数です。

馬 (5・6・7・8・14・①)

写真⑩



②・③

☆這って歩く。(5・6・7・14) ☆えさを要求して食べる真似をする。(7・14) 写真⑨参照 ☆ビニール製の馬のおもちゃに乗

って歩く。(8・①) ☆ただ走りまわる。(②・③) 兎(6・7

・10・11・13・②・③) 10回以後は兎のお面を用意した。

☆手を顔の横にあげ耳のようにする。(6・7・13) ☆両足

とび。(6・7・13) ☆ギャロップ様に走る。(6・7・10)

☆自分は兎になり、実験者に亀になるよう要求して役割を決め

る。(7・10・11) ☆えさを要求して食べる真似をする。(10・

11) ☆お面をつけて動作する。(10・11・13) ☆腹這いに寝

て泳ぐ真似をして「兎泳ぎ」と命名する。(13) 写真⑩参照

☆手を下にぶらぶらさせて走りまわる。(②

・③) 亀(10・13)

☆這ってまわる(10

・13) ☆お面をつけて動作する。(10・13)



写真⑪

馬 (5・6・7・8・14・①)

写真⑫



☆あお向けに寝て手足をバタバタさせ「亀泳ぎ」と命名。(13) 魚 (6) ☆走りまわる。象 (7) 13・②・③) ☆ひざをつかずに四つ這いで歩く。(7) ☆そろそろ歩く。(13) ☆「お鼻が長いわね」の助言で手をのばして長い鼻にする。(13) 写真⑩参照

いわね」の助言で手をのばして長い鼻にする。(13) ☆「お鼻が長いわね」の助言で自分の鼻の下をのばし指で鼻をおさえる。(③) ☆「ウォー」と実験者にむかってほえる。(②・

③) 鳩 (8) ☆手を左右にあげて羽のようにふりながらスキップのようにとびまわる。カエル (9) ☆両足とび。猫 (6)

☆小さくなって這いまわり「猫」と命名。アシカ (13) ☆両手を高くあげてその場で両足とびをして「アシカ」と命名。熊 (14

・③) ☆すり足で歩く。(14) ☆こわい顔でまわりをにらみながら這ってまわる。(14) ☆走りまわる。(③)

以上述べた表現内容でもわかる通り、特に統制群ではどの動物も同じような表現となり、実験者が「お耳が長いわね」などのヒントを与えてもうまくそれに反応することは少なく、特徴をとらえて表現することがほとんどみられません。これは、少ない回数に多くのものを表現させたことが一番の原因でしょう。それに比べ実験群、特にA夫やE子では、実験者の指示やヒントにも的確

に反応しており、また自分から役割を作ったり、表現したものに命名したり、同じ這う動作でも顔の表情をつけたり、ひざをたてて這ったり、というように非常にバラエティーに豊んだ、演技の細かい表現をしています。これらの点から、二歳児でも充分時間をかけて、指導者が適切なヒントを与えたりすれば、充分表現遊びを楽しむことができ、また創造的な表現もできると考えられます。

4 まとめ

以上の実験を終え、その結果を見て先ずいえることは、二歳児の音楽指導においても、豊かな環境の中で適切な指導を行なえば、相当な効果をあげることが可能である」ということであります。特に、すべての活動に積極的に参加し、充分に楽しんで活動している子どもに指導の効果がよりはっきりとみられます。

殊に歌は子どもたちの生活と密接なつながりがあり、その指導効果も大きいようです。ただ、あらゆる指導の際の条件としては、子どもの理解能力を考慮して、具体性のある教材を選ぶことと、集団指導の場合は個人差を考慮して、どの子どもその能力に応じて十分に自己を発揮できるよう指導することが大切でありましょう。一つ一つの活動における細い指導方法の問題、個人指導と集団指導の問題、音楽における創造性の指導の問題、その他まだまだ多くの点が今後の課題として残されていると思います。

(お茶の水女子大学)